

スペイン語で【アグエスカリエンテス】とは hot water の事である。

だからスペイン語圏では、温泉の出る所にはこの地名が付いている事が多い。ガテマラやベリーズ、その他の国々にもアグエスカリエンテスという地名があるらしい。

もちろんメキシコにもアグエスカリエンテスという街がある。

ただしメキシコシティからバスで 6 時間、355 ペソ(3550 円)という割には、その温泉に行った人に言わせると、あまりたいしたことがないらしい。日本人は温泉に目が肥えている。

さらにメキシコ人の温泉通に聞くと、アグエスカリエンテスよりもサンミゲール・デ・アジェンデという街の近郊の温泉地を勧められた。こっちの方が断然良いと。その近くには日産の大工場があるという話だった。

メキシコのバス

大都市のメキシコシティには、大きなバスターミナルが 4 つあり、それぞれ方面別に東・西・南・北バスターミナルという名前が付いている。

メキシコの長距離バスはたいてい、デラックス、一等、二等の 3 タイプに別れている。

一般に高い金を払うと、座席は快適だし、各駅停車の様に幾つものバス停にとまらないので良いのだが、だいたいはクーラーをガンガンにきかせて寒い事が多い。暑い国ほどそういう傾向にあるようだ。

だからという訳ではないが、今回も二等を選ぶ(単に貧乏なだけだという噂もある)。

因みに、メキシコのバス代は高くて有名だ。デラックスの料金なんて、飛行機とほとんど変わらない。それで飛行機と競合しているのがとても不思議。

さてバスの行き先は、そのサンミゲール・デ・アジェンデ。メキシコシティからバスで 4 時間、値段は 158 ペソ(1580 円)である。

北バスターミナルを出発したバスは、なかなかメキシコシティを出ない。超渋滞である。メキシコは一都市としては、世界最大の人口を誇るだけに車がとても多い。それだけに渋滞は大きな問題になっているようだ。

メキシコシティにいるとわからないが、一步郊外へ出るとメキシコシティが標高の高い所にある事がよくわかる。サンミゲール・デ・アジェンデへの道は、常に下り。そのサンミゲール・デ・アジェンデだって、1800 メートルの所にあるらしいのでかなり高い方であるのだが。

温泉があるのは、サンミゲール・デ・アジェンデ郊外のパラドル・デル・コルティジョという場所。スペイン語だと何かの意味があるらしいが、こんな名前は絶対に覚えられない。

バスからみる風景は、それこそサボテンが育つような乾燥した大地が広がっていて、一体いつになったら温泉地に着くんだろうという雰囲気



“緑の多い山奥の温泉”ではなく、どちらかと言うと乾燥地帯で、サボテンなんか道路の脇に育っていたりする。

なのだった。でもだんだんと、『SPA』と書いてある看板が通りに並び始める。日本の温泉地とは趣が大分違う。

この街は、かなり分厚いガイドブックにもないような街なのに、一発で首都から行ける。噂に聞く以上に、この国はバスが発達している事を窺わせる。

メキシコの長距離バスは、そのルート上であれば望む場所で降りる事が出来るようだった。

温泉リゾートホテル

到着したパラドール・デル・コルティジョの温泉はホテル、レストラン、スパのある複合施設だった。温泉だけが目的だったが、ホテルがついているならそれに越したことはない。さっそく値段を聞いてみると、ガーン、990ペソだという(9900円)。完全に予算外である(これでも平日価格らしい)。

確かにここはきれいでゴージャス。温泉リゾートホテルという感じだった。メキシコにも、やはり温泉を利用した高級リゾートがあるという事を思い知らされたのだった。

絶対泊まれないにもかかわらず、さっそく現地調査。

何と部屋のすぐ前にはひょうたん型のプールが広がっている。敷地には緑も多く、鳥の鳴き声がやむ事がない。部屋も、これまで泊まっている安宿とは大違い。

すっかりここが気に入ってしまった。金を払えば温泉だけ入る事も出来るのだが、温泉後にまたサンミゲール・デ・アジェンデに戻り宿を捜すのも厄介だ。

いつもの様に交渉が始まる。ここの宿のおかみは英語ができる(さすがリゾート)。

結局、朝食を抜きにし、チェックアウトをやや早めるという条件で500ペソ(5,000円)にしてもらった(例によって、事前に財布の中身を調節し、“俺の持ち金はこれだけなんだ！でも泊まりたい。お願い！”攻撃)。絶対人に言ってくれるな、と宿の人。

それでも去年からの放浪を通じて、一番高い宿になってしまうのだった。

メキシコシティで泊まっている安宿の10倍だが、それでもその価値がある。



いわゆるヨーロッパの“高級温泉リゾート”と同じ感じ。この“外湯”の温度は37度くらい。

パラドール・デル・コルティジョ温泉

まずは屋内の温泉に入る。メキシコでも、基本的に水着着用であるが、ここの屋内温泉は貸し切りなので水着無し。8人ぐらいが同時に入れるような浴槽に、お湯が並々入っていた。無味・無臭・無色透明であるが、入っていると体に細かい泡が付いてくる。去年11月に入ったルーマニアの温泉と同じ炭酸系である。

すぐ近くにある源泉が40度前後で、そのまま引いてきているそうだ。薄めても熱してもいない。

産出量は豊富だそうで、掛け流し状態になっている。ただしその関係でこの屋内では 39 度程度で日本人には物足りないかもしれない。

海外に行くと、公園などでそよ風に吹かれながらビールを飲むのが好きな私である。

先レポートにも書いたが、メキシコでは、何故か酒に関する規則が厳しく、屋外でビールを飲むのは違法である。だからいつも安宿に帰って戻るという事になってしまって、今一つ美味しいビールを味わっていなかったのだが、ここでは一人だという事を良い事に、近所で買ってきた缶ビールを温泉につかりながら飲む。これぞ日本的温泉の楽しみ。もちろんドアも窓も全開。鳥の鳴き声も凄い。

ここも標高が高いので、日が暮れるとだんだんと寒くなって来るが、屋内の温泉上がりで体はぼかぼか。

そして今度は屋外温泉へ。部屋のドアから 3 メートルも進むと、そこから飛び込みが出来るほど、部屋の前にプールサイドが広がっている。そしてそこにはテーブルが良い感じにおいてある。

おおっ、確かに高級リゾート。

プールサイドでくつろいでいると、ホテルのスタッフがメニューを持って巡回している。このテーブルに夕食を運んで来てもらう事に。

甘くないチョコレートをベースにしたソースを、チキンを巻いたトルティーヤに掛ける料理である。ホテルのおかみが、「メキシコの料理ならこれ」と勧めてくれたのだが、ちっとも美味くなかった。しかし世界にはけったいな料理があるもんだ。夕ご飯を食べるのは、この人生であと一万回くらいなのに、一体、どうしてくれるんだ、という感じ。

夜、ようやくこのプール温泉に他の客がいなくなったので、全裸になりプールで泳ぐ。

時々遠くを人が歩いていてヒヤリとするが、やはり温泉は全裸じゃなきゃ。

満月が真上にあって、実にきれいだった。

ラグルータ温泉

この宿から歩いて 5 分程の、ラグルータという温泉にも行ってみる。

ここは宿が併設されていないが、温泉が実に凝っている。何と洞窟温泉があるのだ。

幾つかの屋外プールがあり、その奥に、洞窟の入り口がある。25 メートルくらい続いている。中はとても暗い。

天然の岩ではなく、石を積み上げて敢えて洞窟にしているものである。

その先はドーム状の温泉へと続く。天井に小さく窓がきってあり、強い日差しがわずかにドーム温泉の中に入ってくる。外のプール温泉は 37

度くらいで、洞窟を通るうちにだんだんと上がって来て、ドーム温泉の中は 41 度くらいだ。



石を組んである洞窟(というかトンネルかな)。胸までお湯につかって歩く。奥に行くに連れ温かくなる。

洞窟の中の適温を探して通路の中でくつろいでいる人もいる。

同じような作りの洞窟温泉が、この周辺にも幾つかあるらしい。温度がそれほど高くない源泉をもつ温泉の工夫なのかもしれない。掃除がたいへんかもしれないが、結構面白い。

メキシコの温泉の楽しみ方なのか、敷地の中は小さな公園みたいになっていて、ちょっとした散歩もできるし、テラスで食事も取れる。値段はそれなりなのだが、結構本格的な料理を出す。メキシコシティでは、本格的なメキシコ料理はとても高い。結果いつもタコスや屋台のメキシコ料理ばかりだったので、ここで始めてメキシコらしい料理を食べた気がした。もちろんチョコレート料理ではない。



単に温泉を楽しむだけでなく、ガーデンを水着で散歩するのもメキシコの温泉の楽しみの方だった。

サンミゲール・デ・アジェンデという街

この街は温泉への単なる通過点のつもりだったが、せっかく長時間かけてきたので、この街も散策することに。どうも教会を中心とした有名な観光地だという。

旅をしていても、普段教会などにはほとんど行かない。何となく宗教臭いのが嫌なのと、建物にはさほど興味が湧かないからだが、散歩して出て出くわしたラバロキアという教会には、遠くから見た時に、何となく親しみを持った。

メキシコの石は、ピンクがかった肌色のものが多いのだが、この教会もそういう石で出来ており、青空にとてもよく映えている。

この教会、ヨーロッパから持ってきた絵葉書をベースに設計されたいらしい。19世紀のものだそう

だ。親しみを覚える理由を考えていたら、ディズニーランドが浮かんできた。ほとんど行った事が無いので、全然違うかもしれないけれど、教会の回りでは観光客や出店がとても楽しそうで、何となくそんなイメージがダブる。

サンミゲール・デ・アジェンデの街並み自体は、18世紀に作られたものだという。

スペインの影響を受け、実にヨーロッパ的。メキシコシティとは全く違う雰囲気である。こういうのをコロニアル都市というらしい。教会があり、その横には必ず広場がある。

街の中心は山の中腹に作られており、坂が多い。石畳の道やブロックを区切る細い道などを歩くとここがメキシコという事を忘れてしまう。

近くには、美術学校が数校あって、世界中から留学生や芸術家が集まる所らしい。民芸品、陶芸、金属加工細工、木工細工、ペンダントや指輪などの小物、ガラス細工、絵画などが多く売られている。さらに観光客を相手にするバンド演奏や大道芸などが公園などで行われている。



メキシコシティと違って、空がとても澄んでいる。メキシコ産の石が青空にとても映える。



ヨーロッパの旧市街の様な街並み。車の通行を制限するととってもいいのだが。



ガラス細工がとても素晴らしい。クリスタルガラスよりは、沖縄の琉球ガラスに似ていた。

美術学校では、絵画や彫刻、彫り物、ガラス細工などを教えているという事だった。中には短期でもOKというレッスンがあるらしい。

ガラス製品は、大味なんだけど時々引かれるものがある。ガラス細工といえばチェコだが、チェコの精巧さは微塵も無いが、別のセンスがあふれている様な気がする。

ここは街を歩くだけで楽しい所だ。

週末という事もあるが、観光客であふれている。英語を話す人も多いので、アメリカの観光客がたくさんいる様だ。通りには車の渋滞や路駐がすごい。近くの都市には日産の大工場があるのでアメリカ車以外では日産の車が多い様だ。

この街にはマーケットもある。

さすがトルティーヤ(タコスの生地。トウモロコシで出来ている)の国だ。焼きトウモロコシが売っている。醤油味でないのが残念だが、塩をつけてもうまい。1本6ペソ(6円)。



焼きトウモロコシ。焼くのはもちろん炭火。香ばしい臭いがあたり一面に広がり、たまらず買ってしまった。

ピラミッド『テオティワカン』

さて、いよいよピラミッド。

メキシコシティから北に50キロ、バスで1時間ほどの場所に、メキシコ最大の都市遺跡、【テオティワカン】がある。

たくさんの観光客が行くためかバス代はとても安い。25ペソ(250円)である。

テオティワカンは、4~7世紀の間に繁栄した都市だそうだ。推定では10万人とも20万人ともいわれる人口を擁していたらしい。当時のヨーロッパでも、それほどの人口を擁していた都市は数えるほどしかなかったの、いかに大規模だったかがわかる。

大小2つのピラミッドがある。大きい方を『太陽のピラミッド』といい、小さい方を『月のピラミッド』という。

テオティワカンが滅んでだいぶたってからやってきたアステカの人々が太陽と月の神話の舞台と考えたらしい。

太陽のピラミッドは、高さが65メートル、底辺の一边は225メートルもある。そこへ登る階段は約250段だ。

とても急な階段で、恐らく40~45度はあると思う。ちょっと怖い。

ただでさえ標高が高く酸素が薄いのに、この急な階段を登るとかなり息が切れる。だが、上り切ると、眼下には素晴らしい眺めが広がり、遺跡全体の構図が良く分かる。

ピラミッドと聞くと、エジプトの、切り出した馬鹿でかい石を積み重ねたものをイメージするが、メキシコのピラミッドは、10~30センチの石を利用している。

現在はそれらを、セメントで固めてしまっているのが少し残念だ。とてもきれいに仕上げられてしまっている(立ち入り禁止の部分もだいぶ丁寧に最新鋭の補修がされてしまっているみたいだ)。

こんなに壮大なものを作り上げる為には、高い数学と土木建築の技術が必要はずだ。しかしこのテオティワカンの文明は、8世紀には消滅してしまっており、その理由は謎に包まれている、という部分が旅心をくすぐってくれる。

しかし凄い構造物だ。早めにエジプトに行きたくなった。



太陽のピラミッドの頂上から見た。月のピラミッド。こちらは、高さ46メートル、底辺が150 x 120メートル。



メキシコ産の赤みを帯びた石が幾つも並べられている。当時は顔料で色付けされていたらしい。

次の国へつづく